

# 博士学位論文審査要旨

2011年6月16日

論文題目： 女性のライフコース選択と生活領域の視点からみたアイデンティティとの関連

学位申請者： 渡邊 ひとみ

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 内山 伊知郎

副査： 心理学研究科 教授 中谷内 一也

副査： 心理学研究科 教授 青山 謙二郎

要 旨：

近年、勤労女性の増加を受け、女性のライフコースに影響を及ぼす要因が検討されているが、心理学的要因を検討した研究は少ない。そこで本研究では、多様な選択肢をもつ現代女性の選択する主体としての側面に着目し、ライフコース選択に反映されるアイデンティティ特徴を捉えることで、ライフコース選択に関連する要因を検討した。

第1章では、アイデンティティ構造に学校や家庭など日常的に参加している“生活領域”の概念を取り入れた van Hoof (1997) の理論を中心にアイデンティティの概念について整理した。そして、職業選択が重要となる青年後期から出産を経験する時期までの女性を対象として、アイデンティティと出産後に計画しているライフコース選択（就業継続型、再就業型、退職型、未確定型の4パターン）との関連について新たな視点から検討した。

研究1（第2章）では、日本語のアイデンティティ尺度の作成のため、日米比較検討を行った。その結果、翻訳された尺度は信頼性および妥当性を有することが確認された。

研究2（第3章）では、女子大生を対象に、アイデンティティを形成している生活領域をライフコース選択の視点から検討した。女子大生は、希望するライフコースにかかわらず、「学校」、「実家」、「余暇活動」といった生活領域を中心にアイデンティティを形成していた。しかし、この段階では、ライフコース選択の違いに影響しているアイデンティティ要因はみられなかった。

研究3と研究4（第4章）では、未婚勤労女性を対象に、ライフコース選択とアイデンティティとの関連を検討した。研究3ではまず未婚勤労女性の参加している生活領域を明らかにするために面接調査を実施した。その結果をもとに、研究4では「家庭（実家）」、「趣味・余暇活動」、「職場」、「習い事」、「友人関係」の5領域について質問紙調査を実施した。その結果、仕事に対する意識が高いといわれている就業継続希望女性においても、職場領域のランクがとくに高いわけではないことが見いだされた。また、この結果は実家領域でのアイデンティティの寄与が低下している可能性を示すものであった。

研究5（第5章）では、個全体としてのアイデンティティを測定し、既婚勤労女性を対象にして子どもの有無による差異を検討した。子どもがいない場合、幅広い生活領域の中でアイデンティティが包括的に構築されていることが示された。他方、子どもをもつ場合、家庭や職場を主とする特定の生活領域が個全体としてのアイデンティティに影響していることが見いだされた。

以上、5つの研究を通じて、従来のアイデンティティ研究では取り上げてこられなかった生活領域に対する主観的重要性がアイデンティティとの複雑な関係性のなかで、女性のライフコース選択に影響していることが明らかにされた。

よって、本論文は、博士(心理学)(同志社大学)の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2011年6月16日

論文題目： 女性のライフコース選択と生活領域の視点からみたアイデンティティとの関連

学位申請者： 渡邊 ひとみ

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 内山 伊知郎

副査： 心理学研究科 教授 中谷内 一也

副査： 心理学研究科 教授 青山 謙二郎

要 旨：

上記審査委員3名は、2011年6月10日午後6時30分から約2時間にわたり、学位申請者に面接質問を実施した。提出された論文に対する質疑に対して、適切な応答と説明がなされ、本論文の学術的な価値が確認された。また、アイデンティティに関する心理学はもとより、心理学全般にわたる専門的な知識を十分に有することが確認された。引き続き実施した語学試験（英語）についても十分な学力を有することが確認された。

以上より、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目： 女性のライフコース選択と生活領域の視点からみたアイデンティティとの関連

氏名： 渡邊 ひとみ

## 要旨：

近年、勤労女性の割合増加を受け、女性のライフコースやキャリアコースの差異に影響を及ぼす社会的要因や心理学的要因が検討されている (e.g., Hartung & Rogers, 2000; 森永, 1997)。しかし、女性のライフコース選択に関連する心理学的要因を検討した研究は依然として少ない (小坂・柏木, 2007)。そこで本研究では、多様な選択肢をもつ現代女性の“選択する主体”としての側面に着目し、ライフコース選択に反映されるアイデンティティ特徴を捉えることで、ライフコース選択の差異に関連する要因を検討した。

アイデンティティは Erikson がその概念を提唱して以来、様々な研究者によって多様な視点から検討されてきた。なかでも近年、アイデンティティ構造やその複雑化といった側面に焦点を当てることでアイデンティティ研究に新しい方向性を示したのが van Hoof (1997) である。van Hoof & Raaijmakers (2002, 2003) は、学校や家庭など、私たちが日常的に参加している“生活領域”の概念を取り入れ、生活領域特有のアイデンティティ間の関係を“水平統合”、生活領域特有のアイデンティティと生活領域の枠にはとられない個全体としてのアイデンティティとの関係を“垂直統合”とした。特に垂直統合は、どの領域でのアイデンティティが個全体としてのアイデンティティ、つまり“自分らしさ”に大きく寄与しているのかといった“自分らしさ”の在り方を直接的に表す重要な構造的側面であり、主観的重要性の高い領域でのアイデンティティほど個全体としてのアイデンティティに影響する程度が強いことが指摘されている (e.g., Schneider & Waite, 2005)。そこで本研究では、アイデンティティの垂直統合に着目し、職業選択が重要なテーマとなる青年期後期から出産を経験する時期までの女性を対象として、アイデンティティと出産後に計画しているライフコース選択 (就業継続型, 再就業型, 退職型, 未確定型の4パターン) との関連を検討した。

まず研究1では、どのような生活領域においても使用可能な日本語のアイデンティティ尺度の作成を試みた。アイデンティティの4側面 (コンピテンス, 抑制, 感情, 対人行動) を測定する英語表記の形容詞20項目 (van Hoof, 1997) を日本語に翻訳し、日米比較検討を行った結果、オリジナルのアイデンティティ尺度は事前に想定されていた4つの下位尺度から成り立っており、また日本語版アイデンティティ尺度においても同様の4因子構造が確認された。さらに、日本語版アイデンティティ尺度は信頼性および妥当性を有することも確認された。

研究2では、女子大生を対象に、アイデンティティを形成している生活領域やその主観的重要性、また生活領域特有のアイデンティティ特徴をライフコース選択の違いから検討した。女子大生は、希望するライフコースにかかわらず、学校、実家、余暇活動といった生活領域を中心にアイデンティティを形成していた。さらに、再就業型女性は他のライフコースを選択した女性よりも生活領域特有のアイデンティティを多く統合しているという意味で、より複雑なアイデンティティ構造をもっていることも明らかとなり、アイデンティティを形成している生活領域数の多さには、アルバイト領域のような社会的状況への関与が影響している可能性も示唆された。しかし、大学生の段階では、ライフコース選択の違いに影響を及ぼすほどアイデンティティ自体が確固たるものとして存在するに至っていない可能性も示された。

研究3および研究4では、未婚勤労女性を対象に研究を行った。研究3では未婚勤労女性の参

加している生活領域やライフコース選択に影響を及ぼす要因を中心に面接調査を実施し、実情把握を行った。その結果、“職場環境の良さ”や“お金の必要性”などの社会的要因が出産後の就業継続希望に影響していたが、同時に就業継続しやすい職場を意識的に選択するなど、希望するライフコースを実現するために自発的に行動する姿もみられた。さらに、未婚勤労女性にとっての職場領域は、内発的な欲求や興味と合致するという意味で満足感と結びついた領域であったが、他者支援に結びつく領域ではなくむしろ競争的な領域であることも明らかとなった。

続く研究4では、家庭（実家）、趣味・余暇活動、職場、習い事、友人関係の5領域について質問紙調査を実施した。多くの先行研究（e.g., Giele, 2008; Holloway et al., 2006）では、結婚後に“女性自らが築いた新しい家庭”とライフコース選択との関連が指摘されてきたが、本研究では“実家”という意味での家庭においてもライフコースによる特徴がみられ、退職型女性や再就業型女性の多くが実家領域でのアイデンティティが最も大きく寄与したアイデンティティ構造をもつことが示唆された。また、自らが築く家庭への意識や家庭に対する主観的重要性は女性の成長とともに自然と高まることが報告されていることから（Friedman & Weissbrod, 2005）、自らが築く家庭と同時に、実家領域を重視することがない女性が“就業継続”というライフコースを選択する可能性も示された。

研究5では“個全体としてのアイデンティティ”自体の測定も新たに加え、子どものいない既婚勤労女性と子どもをもつ既婚勤労女性のアイデンティティ構造を比較検討した。その結果、子どものいない既婚勤労女性のアイデンティティ構造には、日常的に参加している複数の領域でのアイデンティティが包含されていたが、子どもをもつ既婚勤労女性においては、“家庭”や“職場”といった特定領域でのアイデンティティのみが個全体としてのアイデンティティに影響しているという特徴がみられた。

以上の結果を踏まえ、まず、アイデンティティがライフコース選択に影響し始める時期について述べる。青年期後期においては、職業選択とアイデンティティとの関連が多く指摘されてきたが（e.g., Bosma, 1992; 杉村, 2001）、女子大生を対象とした研究2では、ライフコース選択の差異に影響するアイデンティティ要因はないことが示された。よって、就業も結婚もしていない女子大生のアイデンティティは、ライフコース選択に影響を及ぼすほどしっかりとはまだ確立されていないことが示された。しかし、未婚勤労女性については、ライフコース選択に影響を及ぼすアイデンティティ要因が特定されたことから（研究4）、アイデンティティがライフコース選択に実際に影響し始める時期は青年期後期ではなく成人前期であることが示された。

次に、ライフコース選択の差異に影響を及ぼすアイデンティティ要因に関しては、単純にアイデンティティ得点の高低だけがライフコース選択の差異を予測するのではなく、生活領域に対する主観的重要性とアイデンティティとの複雑な関係性がライフコース選択の差異に影響していることが示された。またアイデンティティは、“出産後も仕事を続けるか”もしくは“出産を機に一旦仕事から離れるか”といった決定ではなく、“何らかのかたちで今後も仕事に携わるか”もしくは“完全に仕事から離れるか”といった決定に影響を及ぼしていることも示された。しかし、既婚勤労女性においてはライフコース間での比較検討を行っていないため、結婚後においてもアイデンティティが同様の働きをもつのかといった点は明らかとはならなかった。

最後に、ライフコース選択とアイデンティティ構造との関連について述べる。まず、アイデンティティを形成している生活領域、つまり個全体としてのアイデンティティに含まれる生活領域の種類は、ライフコースに関係なく概して共通していることが明らかとなった。しかし、未婚勤労女性においては、個全体としてのアイデンティティに実家でのアイデンティティが大きく寄与しているかどうかという点がライフコースにより異なったため、実家領域でのアイデンティティの在り方がライフコース選択を捉える際のポイントとなることが示された。また、出産後の既婚勤労女性においては、個全体としてのアイデンティティに影響する生活領域特有のアイデンティティ数が限定されるといった特徴がみられたが、本研究で対象とした子どもをもつ既婚勤労女性

は、既に“出産後も就業継続する”ことを選択した女性であったことから、このようなアイデンティティ構造をもつこと自体が“就業継続”というライフコース選択に関係している可能性がある。しかし、子どもをもちながらも働き続ける中で自然にこのような構造をもつようになるのか、もしくはこのようなアイデンティティ構造をもつことが出産後も就業継続していくためのポイントとなるのかといった点は明らかでない。したがって、今後は縦断研究を行い、未婚の段階からのアイデンティティ構造の変化を包括的に検討する必要がある。

本研究では、調査対象者を大手企業に勤務する女性に限定していたが、今後は企業規模の異なる会社に勤務する女性も調査対象に含めながら、長いスパンでの縦断研究を行う必要がある。さらに、実際に出産後も就業継続した女性と、育児後に再就業した女性や退職した女性とを比較検討することで、アイデンティティとライフコース選択との関連をより明確に捉えることができるだろう。また今後は、アイデンティティの水平統合の視点を取り入れ、さらに個々人がアイデンティティを形成しているすべての生活領域を分析に含めることができれば、女性の仕事とのかかわり方を検討したアイデンティティ研究に広がりがあると考えられ、またさらなる新しい方向性を示すことができるといえるだろう。